

令和8年度 SPOD-FD 調査研究プロジェクト一覧

番号	プロジェクト名	プロジェクトメンバー（※は代表者）
1	学生の読む力と書く力を高める教授法・授業設計・カリキュラムデザイン	上月翔太※（愛媛大学）、蝶慎一（香川大学）、飯尾健（徳島大学）、加藤朱莉（新居浜工業高等専門学校）
2	オンラインによるFDプログラムの共同開発	飯尾健※（徳島大学）、杉田郁代（高知大学）、上月翔太（愛媛大学）、仲道雅輝（愛媛大学）、吉田博（徳島大学）
3	保育・幼児教育分野 FD プログラム開発	塩川奈々美※（徳島大学）、寺川夫央（今治明德短期大学）、佐藤慶太（香川大学）、船本孝子（徳島文理大学短期大学部）
4	学修者本位の大学教育におけるTF（ティーチング・フェロー）等の資質・能力の向上とその専門性に関する研究	蝶慎一※（香川大学）、上月翔太（愛媛大学）、吉田博（徳島大学）、飯尾健（徳島大学）、寺田悠希（高知大学）
5	学生支援FDコンテンツの開発	杉田郁代※（高知大学）、井ノ崎敦子（徳島大学）、大沼泰枝（香川大学）、坂本智香（高知大学）、塩川奈々美（徳島大学）、蝶慎一（香川大学）、吉田博（徳島大学）
6	SoTL 活動を支援する教育実践コミュニティの構築と実践	吉田博※（徳島大学）、田巻公貴（徳島大学）、俣野秀典（高知大学）、西本佳代（香川大学）

令和8年度 SPOD-FD 調査研究プロジェクト申請書

2026 年 4 月 22 日

1. プロジェクト名称(前年度からの継続の場合は名称の後に「(継続)」と記載)

学生の読む力と書く力を高める教授法・授業設計・カリキュラムデザイン(継続)

2. プロジェクトメンバーの氏名及び所属(代表者に※を付ける)

※上月翔太(愛媛大学)、蝶慎一(香川大学)、飯尾健(徳島大学)、加藤朱莉(新居浜工業高等専門学校)

3. プロジェクトの背景と目的(200~400 文字程度)

本プロジェクトは学生の読む力と書く力の双方を高めるための方策を検討し、各教員や各大学の取り組みに活かし得る知見を提供するものである。大学を取り巻く環境の変化にかかわらず読むことと書くことは大学教育の中心であり続けることは間違いなく、その改善に資することは SPOD-FD としても目指すべきところである。本プロジェクトは以下の4点において特徴を有する。すなわち、書くことだけでなく読むことにも同程度焦点を当てている点、生成 AI といった新たな技術とのかかわりを扱う点、専門分野の FD の一環とする点、個々の授業を超えてカリキュラム/学習環境/学習支援についても検討を行う点である。

4. プロジェクトの計画(複数年度にわたる構想を計画している場合は最終計画まで記載)

時期	取組内容	
R8 前期	(1)SPOD フォーラムでの関連プログラム開講 (2)分野別・機関別のリーディング/ライティング教育における論点の整理	(5)ライティング能力向上のためのカリキュラムデザインに関する研究レビュー
R8 後期	(3)リーディング/ライティング FD 教材開発 (4)リーディング/ライティング学生向け教材開発	(6)講師派遣プログラムによる研修の実施

5. 教育開発研究支援費の計画

教育開発研究支援費は必要としない

6. 成果の発表方法

- ・学会等での発表(SPOD フォーラム、大学教育学会課題研究集会、大学教育研究フォーラム等)
- ・研究論文
- ・FD 教材の開発(SPOD オンラインFD プラットフォーム等での提供)
- ・FD 研修プログラムの開発(SPOD フォーラム、SPOD 内講師派遣プログラムでの提供)
- ・学生向け教材の開発(愛媛大学学習支援チャンネルでの提供等)

令和 8 年度 SPOD-FD 調査研究プロジェクト申請書

2026 年 4 月 24 日

1. プロジェクト名称(前年度からの継続の場合は名称の後に「(継続)」と記載)

オンラインによるFDプログラムの共同開発 (継続)

2. プロジェクトメンバーの氏名及び所属(代表者に※を付ける)

飯尾 健※、杉田 郁代、上月 翔太、仲道 雅輝、吉田 博

3. プロジェクトの背景と目的(200~400 文字程度)

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、インターネットからオンデマンドで閲覧できる動画教材等の FD コンテンツが SPOD コア校を中心に開発・公開されるようになった。その結果、SPOD 加盟校は時間や場所、あるいは所属大学に関係なく、ニーズに応じて公開されたコンテンツを用いることでより容易に FD を実施したり、各教員が自己の課題に合わせた自己学習が可能になった。

しかし、公開されているコンテンツは掲載場所が異なり、コンテンツに関する情報も集約されていないため、SPOD 加盟校の教職員が自身のニーズに合わせて必要なコンテンツにアクセスすることは容易ではない。したがって本プロジェクトでは、SPOD コア校に存在するオンデマンド FD コンテンツに各加盟校の教職員が容易にコンテンツへアクセスできる環境を整備し、コンテンツの有効活用を促進するため、これらの情報を集約したサイトの構築ならびにさらなるコンテンツの充実を目指す。

4. プロジェクトの計画(複数年度にわたる構想を計画している場合は最終計画まで記載)

令和 7 年度においては、これまでの成果をふまえ SPOD 公式サイト内に「FD・SD コンテンツ」の名称で正式版をオープンした。一方でまだ収録されていない動画コンテンツも多く、これらをいかに迅速かつ網羅的に収集・公開するかが課題として浮かび上がった。そのため、これらのコンテンツの収集・公開をするための仕組みづくりが課題となっている。また、それらの作業の仕組みを属人化することなく、誰でも・持続可能な形で継続することが重要であると考えられる。

そこで令和8年度は、「FD・SD コンテンツ」の充実に向けて以下の 3 点を計画・実施する。

- ① 生成 AI の1つである Notebook LM を用いた、迅速なコンテンツ記事作成・公開の仕組みの開発
- ② 他の調査研究プロジェクトの連携を含めたコンテンツのさらなる充実
- ③ Tulip ML やぼっちゃん ML 等の媒体を通じた広報活動

5. 教育開発研究支援費の計画(執行時期が分かる場合は記載)

計 44,000 円

- Notebook LM(Google AI Pro プラン): 年額 29,000 円(2026 年 5~6 頃執行予定)
https://one.google.com/ai?gl_last_touchpoint=62&gl_landing_page=5&utm_source=notebooklm&utm_medium=web&utm_campaign=upgrade_page
- 大学教育研究フォーラムでの発表の場合の加費: 5,000 円(2027 年 1 月頃確定、執行予定)
- 関係書籍・文献の購入: 10,000 円(2026 年 12 月頃確定、執行予定)

6. 成果の発表方法

Tulip-ML、ぼっちゃん ML、SPOD-ML 等各媒体で広報

可能であれば 2027 年の大学教育研究フォーラムにて発表

令和 8 年度 SPOD-FD 調査研究プロジェクト申請書

2026 年 4 月 21 日

1. プロジェクト名称(前年度からの継続の場合は名称の後に「(継続)」と記載)

保育・幼児教育分野 FD プログラム開発(継続)

2. プロジェクトメンバーの氏名及び所属(代表者に※を付ける)

塩川奈々美(徳島大学)※、寺川夫央(今治明德短期大学)、佐藤慶太(香川大学)、船本孝子(徳島文理大学短期大学部)

3. プロジェクトの背景と目的(200~400 文字程度)

保育士養成校においては、文部科学省が定める「5 領域」に関する知識・技能を備えた人材育成が目指されており、各領域の専門家が各々の専門性に基づく科目を担当する体制がある。この教育体制により、高い専門的知識・技能を教授する教育が実現できる一方、必ずしも教員に保育に関する知見が求められていないことや、科目間での整合性や連関が十分に図られていない点が課題として指摘されている¹⁾。近年の社会構造の変化に伴い、保育士養成課程における学生、教員、養成校の多様化、保育・幼児教育現場において対応が求められる課題の複雑化なども指摘されている²⁾。

本プロジェクトでは、SPOD 加盟校内の保育・幼児教育分野担当者と連携し、保育・幼児教育分野 FD プログラム開発に取り組む。令和 8 年度は前年度の取組で担当者が企画した大学間連携による合同 FD ワークショップの開催とその振り返りに取り組む。

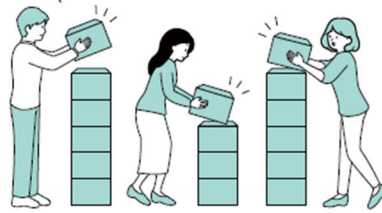
〈参考文献〉

- 1) 伊藤一統(2016)「保育学科の改革の取り組み」『人間生活科学研究』第 51・52 合巻,5-8.
- 2) 矢藤誠慈郎(2022)「保育士養成の現状と課題」『日本家政学会誌』Vol.73, No.5, 279-284.

4. プロジェクトの計画(複数年度にわたる構想を計画している場合は最終計画まで記載)

- ① 徳島文理大学・今治明德短期大学担当者との合同 FD 企画「学びのチャンスを逃がさない！学生の苦手意識と向き合いワークショップ」を開催する(令和 8 年 8 月 18 日(火)13:00-15:45、場所:徳島文理大学 高松駅キャンパス)
- ② 取組①に向けたワークショップ試行会の開催(前期期間中に対面で実施)
- ③ 担当者打合せ(随時、原則オンライン)
- ④ 取組①②の内容を振り返り、実践報告。

学びのチャンスを逃さない！ 学生の苦手意識と向き合う ワークショップ



令和8年
8月18日(火)
13:00~15:45

保育士養成課程における授業では自己表現が求められる場面がありますが、苦手意識から本来の力を発揮できず、パフォーマンスを抑制してしまう学生の姿が見受けられます。

保育士は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域にわたる知識・技能を幅広く修得することが求められる専門職であり、自分の得意・不得意を受け止めながら、苦手なことにも前向きに挑戦する姿勢をもつことが大切です。

そこで本ワークショップでは、学生と教員がそれぞれの立場から「学生の苦手意識」に向き合い、理解を深めることを目的とします。このワークショップを通じて、教員は学生の苦手意識への理解を深め、自身が担当する科目について学生がより参加しやすい授業へと改善することを目指します。学生は他者と意見交換しながら自身の学びについて振り返り、今後の大学での学びに活かすヒントを得ることを目指します。

対象者 今治明德短期大学、徳島文理大学、徳島文理大学短期大学部の保育・幼児教育分野の学科教員及び学生

会場 徳島文理大学 高松駅キャンパス (WS会場) E0304 / (控え室) E0301
1階ロビーの「低層階用エレベーター」から3階にお越しください。

参加方法

- 参加方法
各校担当者が取りまとめを行います。担当者に参加の意向をお伝えください。
- 参加費
無料
旅費等は各自負担にてお願いいたします。旅費支給等に関する内容は各校担当者にご確認ください。

共催 SPOD-FD 調査研究プロジェクト
徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部
今治明德短期大学

本企画は、SPOD-FD 調査研究プロジェクトおよび徳島文理大学「令和8年度 特色ある教育・研究」事業の助成を受けています。

プログラム

- 12:40 開場、受付
- 13:00 開会の挨拶、本日の流れ
- 13:08 アイスブレイク
- 13:28 アンケート結果共有
- 13:38 ワーク●&共有
- 14:25 ワーク●&共有
- 14:37 (休憩)
- 14:52 ワーク●&共有
- 15:35 総括コメント
- 15:40 閉会の挨拶
- 15:45 記念撮影

問合せ先

- 企画全体に関すること
福川 崇々美 shiokawan@tokushima-u.ac.jp
- 大学ごとの参加に関すること
・ 徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部 関係者
鈴木 孝子 funamoto@tku.bunri-u.ac.jp
・ 今治明德短期大学 関係者
香川 共央 fuo@meitan.ac.jp

図 合同 FD 企画チラシ

5. 教育開発研究支援費の計画(執行時期が分かる場合は記載)

費目		執行時期	金額(予定)
謝金	会場スタッフ:学生アルバイト×2名	8月下旬	30,000円 (15,000円×2名分)
出張費	試行会・対面打合せ(場所未定) 合同FD(香川県高松市)	前期期間中 8月18日	20,000円 (10,000円×2回分)

6. 成果の発表方法

(令和8年度)大学教育カンファレンス in 徳島

(令和9年度)SPOD フォーラム 2027、日本保育学会

令和8年度 SPOD-FD 調査研究プロジェクト申請書

令和8(2026)年4月27日

1. プロジェクト名称(前年度からの継続の場合は名称の後に「(継続)」と記載)

学修者本位の大学教育における TF(ティーチング・フェロー)等の資質・能力の向上とその専門性に関する研究 (継続)

2. プロジェクトメンバーの氏名及び所属(代表者に※を付ける)

※蝶慎一(香川大学、調査研究プロジェクト代表者)、上月翔太(愛媛大学)、吉田博(徳島大学)、飯尾健(徳島大学)、寺田悠希(高知大学)の5名 *敬称略

3. プロジェクトの背景と目的(200~400 文字程度)

本プロジェクトは、学修者本位の日本の大学教育における TA の上位版である TF(ティーチング・フェロー)や GSI (グラデュエート・スチューデント・インストラクター)等(以下、TF 等)の資質・能力とその向上、各大学で求められている具体的な業務内容や専門性について、それらの現状を描出し、関連する各種規程や情報を整理、分析することを目的とする。これまでも大学院の博士(後期)課程が多く在籍してきた国立の研究総合大学においては、TF等の状況等が一部ではあるが報告されている(例えば、佐藤万知編(2019)『SA/TA 制度を活用した大学教育の質向上への挑戦』(高等教育研究叢書 150)広島大学高等教育研究開発センター、pp. 36-47)。

しかしながら、SPOD コア校を含め地方国立大学におけるTF等の制度・規定や業務内容、それに伴うTF等を対象とした研修の実態については、ほとんど調査研究が行われていない。

そこで、本プロジェクトでは、プロジェクトメンバーの本務での業務状況や負担等に十分配慮しつつ、新たに「プロジェクト研究会」を発足させ、各メンバーの所属大学におけるTF等に関する情報共有、共通の理解を促進させる。その上で、今後一層、国立大学において重要視される大学院教育を念頭に、どのようなTF等の研修の構築や、TF 等の資質・能力の育成、その専門性を図っていくのかについて、コア校を含む SPOD 加盟校にできるだけ資するリソースを提供することを目指す。

4. プロジェクトの計画(複数年度にわたる構想を計画している場合は最終計画まで記載)

本プロジェクトは、下表の通り、令和 7 年度~令和8年度の計2カ年度の研究期間を設定している。プロジェクトメンバーが同一の所属大学ではなく、離れて勤務していることから、オンライン会議システム等を活用し、出張旅費等を極力削減しながら、「プロジェクト研究会」を今年度は2回程度開催する。それらの研究会を軸に本プロジェクトを着実に進捗させていくことを目指す。詳細な計画は、以下の表の通りである。

年度・時期	研究内容(予定)	
令和8年度 [前半]	(1) プロジェクト研究会 (7月中・下旬頃) ・令和7年度の報告として提示した 2025 年 7 月 11 日のプロジェクト研究会(独自)、SPOD フォーラム2025における関連講座の受講等、大学教育カンファレンス in 徳島での特別講演の内容を踏まえ、 プロジェクトメンバーの所属大学の TF 等の再整理し、導出される検討課題や本研究の方向性、見込まれる成果を議論する。	(年度通じて) ・プロジェクトメンバーの所属大学におけるプレ FD を含む等の情報収集、整理、共有。
令和8年度 [後半]	(2) プロジェクト研究会 (12月中・下旬頃) ・本プロジェクトのまとめ、総括を行い、コア校をはじめ、SPOD 加盟校に広く共有できるよう議論する。 ・プロジェクトメンバーの共有理解を得ながら本研究のアウトプットとして、TF 等の資質・能力やその育成を促すリソースを提供する(詳細は、(1) プロジェクト研究会 (7 月中・下旬頃)で決める)。 ・FD専門分科会で本プロジェクトの報告を行う(1月下旬頃)。	・プロジェクトメンバーから発案される調査事項等も適宜追加。

5. 教育開発研究支援費の計画

本プロジェクトの教育開発研究支援費(以下、研究費と略記)は、以下の表の通りである。大きくは2点であり、(1)関連文献・資料の購入、(2)コア校を含む SPOD 加盟校に資する TF 等の資質・能力やその育成を促すリソース提供のための印刷費、を計上する。

年度	必要となる研究費(内容)
令和8年度	10,000 円(関連文献・資料の購入) 40,000 円(コア校を含む SPOD 加盟校に資する TF 等の資質・能力やその育成を促すリソース提供のための印刷費)

※できるだけ必要な研究費に限定できるように努める。

6. 成果の発表方法

本研究プロジェクトでは、以下の 2 点の成果を目指し、着実に進捗させていくことを目指す。

○プロジェクト研究会を通じた研究メンバーの課題共有と相互での情報交換の促進

⇒(1)、(2)

○調査研究の内容に基づく TF 等の資質・能力やその育成を促すリソース提供

⇒(2)SPOD 加盟校に資する TF 等の資質・能力やその育成を促すリソース提供(予定)

※プロジェクトの進捗によっては、令和9年度に入ってからのアウトプットになる可能性あり。

以上。

令和 8 年度 SPOD-FD 調査研究プロジェクト申請書

2026 年 4 月 30 日

1. プロジェクト名称(前年度からの継続の場合は名称の後に「(継続)」と記載)

学生支援FDコンテンツの開発 (継続)

2. プロジェクトメンバーの氏名及び所属(代表者に※を付ける)

杉田郁代(高知大学)※、井ノ崎 敦子(徳島大学)、大沼泰枝(香川大学)、坂本智香(高知大学)、塩川奈々美(徳島大学)、蝶慎一(香川大学)、吉田博(徳島大学)

3. プロジェクトの背景と目的(200~400 文字程度)

令和 4・5 年度の調査研究により、授業の教授法に関する FD は充実している一方、学生支援に関する FD が不足していることが明らかになった。日本学生支援機構の調査によると、成績不振・不登校への対応研修の実施率は約 9%^{※1}にとどまり、専門外のクラス担任・研究指導教員が最前線で支援を担っている。中途退学防止や要支援学生の把握も多くの機関で課題となっており、この分野の FD 開発は急務である。

そこで本プロジェクトでは、令和 7 年度に先行研究の分析とメンバー間での議論を行い、成績不振・不登校学生への支援をテーマにした FD(Tips)の企画を終え、現在その作成を進めている。個々の教員の熱意に依存した体制から、ミドルリーダーの主導で教職員や専門家が連携する「チーム支援体制」への転換を目指し、支援のヒントを『Tips』としてまとめる。ミドルリーダーがこれを活用して部局の体制を可視化・共有することで、「部局内での FD の内製化」による学生支援 FD の不足解消を図る。

※1 独立行政法人日本学生支援機構(2025)

「大学等における学生支援の取組状況に関する調査(令和 5 年度(2023 年度))」結果報告

4. プロジェクトの計画(複数年度にわたる構想を計画している場合は最終計画まで記載)

令和 7 年度中に Tips の企画・開発を終えました。

令和 8 年 5 月上旬には Tips が完成し、5 月中旬には公開予定です。

5. 教育開発研究支援費の計画(執行時期が分かる場合は記載)

Tips 作成にかかる費用 49,000 円

令和 7 年度に申請した 50,000 円と合わせて、合計 99,000 円を支払う予定です。

Tips は 5 月上旬に納品予定であり、同月中に執行する予定です。

6. 成果の発表方法

SPOD の HP 内にある『各種資料』の『調査・報告／調査研究プロジェクト』のページに掲載予定です。

令和 8 年 8 月に開催される SPOD フォーラムにおいて、ポスター発表を行う予定です。

以上

令和 8 年度 SPOD-FD 調査研究プロジェクト申請書

2026 年 5 月 1 日

1. プロジェクト名称(前年度からの継続の場合は名称の後に「(継続)」と記載)

SoTL 活動を支援する教育実践コミュニティの構築と実践 (新規)

2. プロジェクトメンバーの氏名及び所属(代表者に※を付ける)

吉田 博※、田巻公貴、俣野秀典、西本佳代

3. プロジェクトの背景と目的(200～400 文字程度)

SPOD プログラムである「大学教育カンファレンス in 徳島」や「SPOD フォーラム」では、教育実践や FD・SD に関する研究発表の機会が設けられており、日頃から多様な教育実践に取り組む教職員が発表を行っている。これらの発表は、実践者にとって自身の取組を省察し、整理し、成果や課題を可視化するとともに、他者との情報交換を通して今後の改善に向けた示唆を得る貴重な機会となっている。また、専門分野の学会とは異なり、高い学術性が過度に求められない実践ベースの発表の場であることから、専門分野や立場を越えた多様な教職員が参加しやすい点も特徴である。これらの点は参加者アンケートからも示されており、教職員の SoTL (Scholarship of Teaching and Learning) 活動を促進する重要な機会であるといえる。

一方で、SPOD では、教育実践研究を支援する取組として、発表機会に関する情報提供や分析方法の共有を含め、継続的に実践者を支援する仕組みや、実践者同士が相互に学び合う場は十分に整備されているとはいえない。

そこで本プロジェクトでは、「大学教育カンファレンス in 徳島」や「SPOD フォーラム」での発表を第一の目標とし、SoTL 活動を支援する教育実践コミュニティを構築・実践することにより、教職員の教育実践における改善サイクルの促進および研究としての実践の質的向上を図ることを目的とする。

4. プロジェクトの計画(複数年度にわたる構想を計画している場合は最終計画まで記載)

2026 年 4 月

教育実践コミュニティ(概要は別紙参考資料参照)の立ち上げ・始動

2026 年 4 月以降

コミュニティ参加者同士による情報交換や勉強会を定期的に行い、相互の学び合いを促進する。また、参加者の意見を踏まえながら、活動の方向性を適宜調整する

2026年12月

コミュニティ立ち上げ以降の取組および成果を整理し、学会等において発表を行う

※大学教育学会課題研究集会を予定しているが大学教育カンファレンス in 徳島での発表に変更する可能性がある

2027年1月

コミュニティメンバーによる「大学教育カンファレンス in 徳島」での発表

2027年1月～3月

コミュニティの1年間の活動内容および成果を総括的に整理し、次年度の活動へとつなげる

5. 教育開発研究支援費の計画(執行時期が分かる場合は記載)

- ・コミュニティの立ち上げ、運営、成果検証に関わる書籍及び消耗品の購入(30,000円)

6. 成果の発表方法

2026年12月5日・6日北海道大学において開催予定の「大学教育学会課題研究集会」または、2027年1月6日徳島大学において開催予定の「大学教育カンファレンス in 徳島」において、コミュニティの立ち上げ、活動内容、意義やこれまでの成果についてポスター発表を行う。

その後もコミュニティを発展させ、2027年度以降の「SPOD フォーラム」などの機会に成果発表を行う。